

古方便覧下冊

東洞吉益先生校閱 門人 河内 六角重任 毅夫筆記

桃核承氣湯 桃仁六分 桂枝 甘草 芒消各五分 大黃一匁

右五味水一盞七分を煮て六分を取り、消を内れ消せ令む。

- 少腹急結上衝して狂の如きものを治す。急結とは満と少し異にして少腹より上へ堅くひっぱるを云うなり。
- 婦人經水通ぜず少腹満して痛むによし。又月經通ぜざること一年、或いは二三年にして漸々に腹満するを治す。
- 熱病譫語して狂人の如く、或は下血し少腹急結して痛むによし。
- 産後に血塊あり、腹痛するによし。又悪血下りず心下へさしこみ痛みて目眩するによし。芎歸膠艾湯の証は血おりつよくして腹痛目眩するによし。
- 打撲損傷腫痛によし。
- 死胎或いは胎衣下りざるに功あり。
- 一婦人脹満を患う。其の腹漸々に大になりて床に觸れて皮膚腐爛して水滴る。

試に六尺の帯をまわして見るに猶^{なお}足らず。人皆必死と云。余此方を與^{あた}えて六七十日にして全く愈たり。凡そ脹満の証腹状平にして青筋あるものは治し難く、其の脹ること大なりとも、こんもりと凸起^{なかだか}なるものは治す。

- 一婦人産後五六日心腹切痛して跳躍旋轉し、號呼^{ごうこ}して止ず。三日に至て氣息已に絶なんとし、汗出て雨の如く、面色土の如し。家人只其の死を待つのみ。余即紫圓を以て下すに、水瀉五六行。疾一帯するが如し。又診するに少腹満して腰脚攣急以て動かすべからず。余飲しむるに此方を以て二十日にして
まったくいゆ
全愈。

- 一婦人陰門腫痛て剋^{えぐる}が如く、上衝頭痛日夜號泣して愈ざること數日。余診するに腹鞭満、少腹急結す。此方を用いること三劑にして其の夜益甚し。暁天^{あけがた}に及

て忽然として膿血を出し、病頓に愈たり。

○ 一男子少腹堅急して痛上下す。氣上逆して食を欲せず。愈ざること三月ばかり許。

此方を與ること五十劑にして全く瘳いゆ。

甘草湯 甘草二錢

右一味水一盞二分を以て煮て六分を取る。

- 病急にせりつめ、或は咽喉強く痛むによし。
- 東洞先生云う。牙齒の強く痛て忍びがたきに用て即効あり。少しにても痛のゆるきには効なし。とかく甘草は急迫するを治すと心得べしとなり。

桔梗湯 桔梗一錢 甘草二錢

右二味水一盞八分を以て六分を取る。

- 甘草湯の證にして咽中痛て膿あり。或は粘痰出るものを治す。

排膿湯 甘草八分 桔梗一錢二分 生姜四分 大棗一錢

右四味水一盞八分を以て煮て六分を取る。

- 膿血ある腫物癰の類、膿を催するものを治す。腫毒には伯州散を兼用し、時々梅肉散にて下すべし。

芍藥甘草湯 芍藥一錢四分 甘草一錢四分

右二味水一盞二分を以て煮て六分を取る。

- 脚攣急甚しきものを治す。

甘遂半夏湯 甘遂二分 甘草八分 半夏一錢二分 芍藥八分

右四味水一盞半を以て煮て四分弱を取り、蜜四分弱を内れい煮て六分を取る。

- 下利快しと雖も急迫して心下鞭滿するものを治す。
- 積氣急にふさがり、いきだはしく痛によし。

芍藥甘草附子湯 芍藥 甘草各一錢二分 附子六分

右三味水二盞を以て煮て六分を取る。

- 芍藥甘草湯の證にして惡寒するものを治す。
- 婦人手足引つり痛み或は脚氣の証によし。

- 中風手足冷しびれ、拘急するによし。
- 疝気にて腰痛屈することなしがたきに、平水丸或は控涎丹を考へ兼用すべし。
- 一男子年五十、卒倒昏愵す。醒めて後身體僵直して手足運動することあたわず。
治せざること十七八日許。余其腹を按せば、拘攣して痛む。乃ち此方を與え、五十餘劑にして諸症已に除く。又十棗湯を以てこれを攻れば下痢數十行にして全く愈ゆ。
- 一男子惣右脚攣痛して屈伸することあたわず。愈ざること三十日。余乃ち此方及び平水丸を飲ましめ、十劑に及ばずして痛即ち已む。

甘麥大棗湯 甘草六分 小麥四錢 大棗五分
右三味水一盞二分を以て煮て六分を取る。

- 急迫して狂の如く悲傷するものを治す。
- 一婦人年二十八、故なく悲泣すること止ず。余診するに腹皮攣急して少腹に塊あり。即ち此方及び消石大圓を作てあたえ四五日にして全く愈ゆ。
- 狂人泣きさけんで邪祟の如くなるによし。又小児しきりに啼て止まざるによし。

甘草粉蜜湯 甘草二錢 粉一錢 蜜四錢

右三味水九分を以て先に甘草を煮て六分を取り、滓を去り二味を内れ攪ぜて和せしめ煎じて薄き粥の如くす。

愚案ずるに、粉千金に漿米粉に作り、外臺に黍米粉に作り

- 涎を吐し、蚘蟲を吐し、心痛発作時あるものを治す。
- 一婦人、腹痛すること三十日。諸医これを療すれど寸効を奏せず。後には吐して水薬口に入ることを得ず。叫號して鄰を動かす。余乃ち此方をあたえ三劑にして痛退き、二十劑にして全く愈ゆ。

生薑甘草湯 生薑 一錢 甘草、大棗各八分 人參六分

右四味水一盞四分を煮て六分を取る。

- 欬唾涎沫止ず咽燥きて渴し、心下痞鞭して強急なるものを治す。控涎丹滾痰丸を

えらん
擇で兼用すべし。

甘草乾薑湯 甘草二錢 干姜一錢

右二味水一盞二分を以て煮て六分を取る。

- 厥して煩躁吐逆或いは涎唾多く渴せざるものを治す。
- 僧天然曰く、甘草湯、甘草乾姜湯、甘草粉蜜湯三方、癰疽及び諸腫諸瘡を治す。其の疼痛劇しきものは患處に溼ぎて佳き也。

四逆湯 甘草一錢二分 干姜 附子各九分

右三味水一盞半を以て煮て六分を取る。

- 四肢逆厥下利清穀し、或いは下利惡寒或いは身體疼痛するものを治す。
- 世医所謂中寒中湿及び傷寒陰症霍乱等の諸證に厥冷惡寒下利腹痛等あらば皆此方を用うべし。又一年も二年も清穀を下痢すること止まざるに用いてよし。

四逆湯 甘草一錢 干姜 附子各七分半 人參五分

右四味水一盞半を以て煮て六分を取る。

- 下利惡寒し手足厥冷して心下痞鞭するものを治す。

附子粳米湯 附子三分 半夏一錢二分 甘草二分 大棗五分

右五味水一盞六分を以て煮て六分を取る。

- 腹中雷鳴し臍のまわりにて痛み、或は水瀉或いは嘔吐するを治す。

薏苡附子散 薏苡仁 大附子各等分

右二味散と為し方寸匕を服す。日に三。

- 胸痺すること甚して惡寒するものを治す。

薏苡附子敗漿散 薏苡仁十分 附子二分 敗漿五分

右三味杵いて散と為し方寸匕を取り、水一盞二分を以て煮て半減し、之を頓服す。

- 腹中癰を發し身甲錯腹皮急、此を按せば お濡やわらかに腫状の如く、腹に積聚なきものを治す。

大烏頭煎 烏頭四錢

右一味水九分を以て煮て三分を取り滓を去り、蜜六分を内れ再煎し六分を取る。

- 腹痛し或は臍傍絞痛し、發するときは自汗出て手足厥冷するものを治す。久年の

疝氣或は痿躄に此の方を用いてよく徹する時は水を二三升も吐き出し、身ひえあがりて死状の如くなるなり。^{よくよく}能々其の証を詳らかにして用うべし。

○ 一男子年七十。疝瘕を患ること数年なり。東洞先師此方を與て水を吐し、身厥冷して一時ばかりも氣絶す。醒めて後疾立ちどころ愈たり。

○ 一老人年七十許。多年疝氣と云て陰囊偏大にて大き斗との如し。發する寸は寒熱嘔逆し身體腰脚疼痛す。

故に医者桂附の剤を用れば大に困苦して五六十日も愈ず。此の如くなること毎歳二三度づつ發す。余其の症を診するに胸脇苦滿して拘急す。余即ち小柴胡湯をあたへて七八日にして愈ゆ。後發する毎にこれを用いて或は七八日或は十一、二日にして止む。終に發せざるに至れり。これに依って知るべし。病因病名に拘泥する

は粗工のする所にして、疾医の道は唯證候をつまびらか審にして方を処するにあり。方よく其の症に合すれば其の疾として治せずと云うことなし。

烏頭湯 麻黄 芍薬 黄耆 甘草 各六分 烏頭一匁三分を蜜六分を以て煎じて三分を取る。

右五味水九分を以て四味を煮て三分を取り滓を去り、蜜煎中に内れ、更に煎じて和し服す。

○ ^{いわゆる}所謂痛風脚氣疝氣鶴膝風半身不遂等の症に平水丸、七宝丸、十棗湯、紫圓の類を擇びて兼用すべし。

○ 蠱毒の骨痛に常に毎夜芎黄散を用い、時時梅肉散にて下し、後に七寶丸を用うべし。

赤丸 茯苓 半夏各四兩 烏頭一兩 細辛一兩

右四味之を末とし眞朱を内れ色と為し、煉蜜にて丸と為すこと麻子大の如くし、食に先じて酒にて一丸を飲下す。

○ 痰を吐し、沫を嘔し、腹痛或は惡寒身微厥するものを治す。

眞武湯 茯苓 芍薬 生姜各九分 朮六分 附子四分半

右五味水一盞六分を以て煮て六分を取る。

○ 心下悸し頭眩身動し嘔動し、或は腹痛し四肢沈重疼痛小便不利、或は嘔し、或は下利し、拘痛するものによし。

○ 半身不遂手足引きつりふるうに、平水丸控涎丹十棗湯の類を考えて兼用すべし。

- 少陰病腹痛小便利せず四肢沈重疼痛 自^{おのず}から下利するによし。
- 水腫小便不利するに平水丸を用ゆ。
- 癩癩には滾痰丸を用い紫圓にて下すべし。
- 一男子四十三歳。下疳瘡を患て後に左半身不遂手足顫掉(ふるえること)して地に^{なげうた}擲んと欲し且つ癩を兼ね。十日五日に必ず発す。食する寸は人をして代哺せしめ蓐上に仰臥すること已に二三年なりと。余診するに少腹より心下へ至て鞭満し、心悸して拘攣す。乃ち此方及び三黃丸を作つて時々備急圓にてこれを攻む。服すること一月ばかりにして癩亦発せず。又七寶丸を作て服せしむること毎月一次。凡そ七次にして全く愈たり。余此より七寶丸を作てあたえ数効を得たり。後に東洞先生に告ぐ。先生大いに歎じて曰く吾子が用方に察なる。始めて共に疾医の術と謂うべしと。^{それよりのち}尔後先生も是を與えて^{しばしば}数奇効を得られたり。

附子湯 茯苓 芍薬 附子各六分 朮八分 人參四分
右五味水一盞六分を以て煮て六分を取る。

- 身體痛、手足寒、小便不利、心下悸或は腹痛するを治す。
- 痛風、背痛、腰痛、疝氣、脚痛、痿躄或は水腫に控涎丹、平水丸、紫圓或は七寶丸等を擇んで兼用すべし。
- 一書生腫満を病む。小便利せず、心下痞鞭し拘急して痛み、面目大に腫れて不食す。東洞先生此方及び三黃丸兼服せしむること、五七日にして備急圓七分を以てこれを下し、諸症全く愈ゆ。
- 一僧年三十六。余に診治を請て曰く、貧道(僧侶或いは道士の自称)二十の前後淋疾を患ること二三年、愈て後に諸証雜出す。しかしより後腰已下冷て冰雪中に在るが如く盛夏といえども絮衣^{わたいれ}を重て其上を覆う。発する時毎に心腹疔痛して手をつくることをも得ず。腰脊痛み瘳して反側することを得ず。甚だしき寸は息することあたわず。又忽忽として少氣、終夜席を安んぜず。大抵毎夜必ず発す。且つ幼齡より痔漏あり。寒暄に遇毎に乃ち発す。初患てより今に至て十四年を経たりと。余診するに心下悸して痞鞭し、腹皮拘攣す。乃ち附子湯及び平水丸を飲ましめ、時々紫圓を以てこれを攻む。服すること半歳許にして諸症全瘳。
- 一婦人年五十有餘。胸痺を患う。飲食味なく。身體^{おうそう}尪瘦にして愈ざること半歳許。

余診するに心下痞鞭心悸し小便少し。即ち人参湯及び三黄丸を作つて飲ましめ服すること二十餘日いまだ其の効を見ず。病者其の速やかならんことを欲して乃ち他医を召ぶ。医これを視て率尔そつじに臍傍に灸す。忽ち心腹切痛して下利数十行臭穢近づくべからず。殆ど死に至らんとす。是に於いて復た余を召ぶ。乃ち大承気湯を以て下して五六日にして諸症頓に退きて飲食すること前日に倍す。居ること七八日、小便不利遍身洪腫し、心下痞鞭腹皮拘攣す。余又附子湯及び平水丸を用いて服すること三十日にして諸症全愈。

- 一男児十歳。脊梁曲がくろうつて偻僂す。両脚攣急して起つことあたわざること已に二年。余此方紫圓を作つて飲ましめ兩月にて全愈。

天雄散 天雄四兩半 龍骨三兩 朮八兩 桂枝六兩

右四味散と為し、酒にて三盞ややを服す。日に三服す。知らざれば稍之を増す。

- 失精の人小便利せず上逆して臍下動あり。惡寒するものを治す。

梔子豉湯 梔子八分 豉二棗

右二味水一盞半を以て先づ梔子を煮て一盞を取り滓を去り、豉を内れ煮て六分を取る。

- 心中懊懣おうのう或は煩熱し胸中塞ぐものを治す。

梔子甘草豉湯 本方に甘草一錢を加え餘は本方に依る。

- 前方の証にして急迫なるものを治す

梔子生姜豉湯 本方に生姜二錢を加え煎法は前方に同じ。

- 梔子豉湯の証にして嘔するものを治す。

枳実梔子豉湯 枳実六分 梔子四分 豉二棗六分

右三味水一盞六分を以て先に二味を煮て八分を取る。豉を下し煮て六分を取り滓を去りて服す。

- 梔子豉湯の証にして胸滿するものを治す。

梔子大黄湯 梔子九分 枳実一棗半 大黄三分 豉四棗

右四味水一盞八分を以て三味を煮て一盞を取り豉を下し煮て六分を取る。

○ 前方の証にして便閉するものを治す

茵蔯蒿湯 茵蔯蒿一匁八分 梔子六分強 大黃六分

右三味水二盞を以て先ず茵蔯を煮て一盞二分を取り、二味を内れ六分を取る。

○ 一身発黄、渴して水漿を引き、寒熱、食せず、心胸安からず。小便利せざるものを治す。此の方に紫圓、備急圓を兼用すべし。

○ 一男子年三十有餘。冬月旅行し、海邊に逗留して恣^{ほしいまま}に魚肉を喫し、又寒気を侵して家に帰り、幾程なく面目身體浮腫して黄色を發すること橘子の色の如く、小便も又藥汁の如く、心胸苦煩し腹滿して飲食すすまず。余乃^{すなわち}此方を與え時々紫圓を以てこれを下し、十二三日にして全く愈

○ 世に黄胖病と云て黄色を發し、心煩息だわしく、腹滿して身だるく、爪甲白く、或は皴みなどするに、此方又は梔子厚朴湯、小柴胡湯を擇び用う。別に一方あり。鐵砂六匁 硫黄八匁 浮石二匁 蕨粉四匁 右四味散と為し毎日酒を持って一錢を服す。

大陷胸湯 大黃九分 芒硝三匁 甘遂七厘半

右三味水一盞八分を以て大黃を煮て六分を取り、硝を内れ消さしめ甘遂末を内れて服す。

○ 結胸心下痛の若し。之を按じて石鞭、或いは少腹に至って鞭滿するものを治す。

○ 胸高く起り、或いは背くぐまり疴瘻の状になり、或は腹内陷下し濡にして背へ引きつり脚細軟羸瘦して歩行ならず。手臂も^{かな}遂わざるによし。

○ 癰を發し或は物に驚き或いは小兒言語することあたわざる類に用うべし。然れども此方日々は用いがたし。本藥には小陷胸湯など用い、此方にて時々下すべし

○ 傷寒大便せざること五六日。舌上^{かわ}燥いて渴し。日晡時潮熱あり。心下より少腹に至って鞭滿して痛み、近づくべからざるものによし。

○ 一男子年十六。其三歳の時胸を^{うち}撲て、胸凸背くぐまりて十三四歳にして寒熱を病み、愈て後腰脚痿弱にして起居することあたわず。百治効なし。此如きこと凡そ三年と。余小陷胸湯を作て飲ましめ三日五日、必ず大陷胸丸を以てこれを攻む。百有餘劑を用て稍歩行することを得て全く愈。

小陷胸湯 黃連四分 半夏一匁四分 栝萸実八分

右三味水一盞八分を以て栝蓐を煮て九分を取り、二味を内れ煮て八分を取る。

- 胸満してふさがり、気むつかしく、或は胸やけ或は腹鳴下利し或は食物すすまず或は胸痛を治す。三黄丸、滾痰丸を兼用すべし。

栝蓐薤白白酒湯 栝蓐実五分 薤白二朶半 白酒二朶

右三味同じく煮て六分を取る。

- 胸背痛或いは喘鳴欬唾するに、控涎丹、滾痰丸を兼用すべし。又病甚きものには紫圓、走馬湯、備急圓の類を考え兼用すべし。

白酒千金方に白載漿に作る。酢なり。漿のこと蜀漆散の下に注す。

栝蓐薤白半夏湯 栝蓐実三分 薤白九分 半夏一朶半 白酒一朶半

右四味同煎して六分を取る。

- 前証甚して心痛背に徹し或は嘔するものを治す。

瓜蒂散 瓜蒂五分 赤小豆五分

右二味散と為し已に合して之を治む。先香豉二朶熱湯七分を以て煮て稀糜(うすい粥)を作り、滓を去り汁を取り、散を和し温頓服す。

- 心胸温々として吐かんとし、或は煩満饑えて食する能わざるを治す。
- 病胸中に在て痞鞭して痛み、或いは痰喘気急、或は発狂、或は癲癩を治す。
- 一男子年三十。暴に発狂す。余先づ飲ましむるに大承気湯を以て下すこと日に数十行。七八日の後此方を作て與え膠涎を吐すること数升。此如くなるもの凡そ三次にして病全愈。
- 一男子平素目赤く眶腫痛むこと数年なり。諸薬効あることなし。余乃此方を作て與え大いに痰涎を吐す。用いること二三次にして全く愈
- 一士人淋病を患ること十二三年。後膿血淋瀝痛み刺すが如く、日夜號泣す。余を招いて曰く、我疾痛楚すること言うべからず。先生為に治を施し玉わんには瞑眩惧るるに足らず。若し治せずんば速に死せんも亦幸いとすと。余乃ち此方七分を飲しめ、大に吐瀉して痛頓に退く。又服すること三次にして病失するが如し。

文蛤散 文蛤十銖

右一味散と為し、沸湯を以て一錢を和して服す。

○ 渴するものを治す。

大半夏湯 半夏二銖四分 人參三分 蜜二銖

右三味水一盞弱を以て煮て六分を取る。

○ 嘔吐心下痞鞭するものを治す。

○ 隔噎反胃によし。滾痰丸を用い、時々紫圓或は桔梗白散用うべし。

小半夏湯 半夏二銖四分 生姜一銖六分

右二味水二盞八分を以て煮て六分を取る。

○ 心下留飲ありて嘔吐するを治す。

○ 一切の病に水を吐し、食を嘔し、薬を受けざるに先ず此方を用うべし。嘔を治して後証に随て方を処すべし。

生姜半夏湯 半夏三銖 生姜汁

右水一盞二分を以て半夏を煮て八分を取り、姜汁四分を内れ、煮て六分を取る。

○ 喘に似て喘せず、嘔に似て嘔せず、噦に似て噦せず、心中憤々然としていかんともすることなきものを治す。

小半夏加茯苓湯 半夏二銖四分 生姜一銖六分 茯苓六分

右三味水二盞八分を以て煮て六分を取る

○ 嘔吐して心下痞し眩悸するものを治す。

半夏苦酒湯 半夏五分 雞子一枚黄を去り白を存し、苦酒を其の中に内る

右二味半夏を雞子殻中に内れ、火上に安き、三沸せしめ滓を去り、少々を含みて之を嚥む。

○ 咽中に瘡を生じ言語することあたはず、声出ざるによし。

○ 痰涎ふさがり、声かれたるによし。又咽痛腫ふさがるによし。

○ 苦酒は醋なり。半夏一銖、雞卵一枚、醋 盞(原文醋の量の記載なし)を以てざつと煎じ用うべし。此症の甚しきは白散、走馬湯あるいは吹薬をすべし。

半夏厚朴湯 厚朴三分 半夏一銖二分 茯苓四分 生姜五分 乾蘇葉二分

右四味水一盞を以て煮て六分を取る。

○ 咽中に炙癭あるが如くびらびらとかかるものあり。或は痰ふさがり、或は風邪にて咽

痛によし。

- 梅核気として、咽へ核のごときもの出て、吐ども出ず、吞めども下らず。久しく愈ざるに滾痰丸を兼用して時々紫圓或は梅肉散にて下すべし。

半夏乾姜散 半夏 乾姜各等分

右二味散と為し方寸匕を取り、水一盞三分を以て煮て六分を取る。

- 乾嘔吐逆涎沫を出すものを治す。

乾姜人參半夏丸 乾姜 人參各一錢 半夏二錢

右三味散を為し、生姜汁を以て糊にて丸と為し梧子の如くし十丸を服す。

- 嘔吐止まず、心下痞するものを治す。

半夏瀉心湯 半夏九分 黃連一分半 黃芩 乾姜 人參 大棗 甘草各四分半

右七味水二盞を以て煮て一盞二分を取り滓を去り、再煮して六分を取る。

- 心下痞鞭或は心煩水を吐し腹鳴、或は反胃、或は食物咽につまり沫を吐く證に滾痰丸紫圓を兼用すべし。
- 平生腹鳴甚しく胸やけ乾嘔して下利するによし。
- 暑に中り寒に中りて下利し、或は痰涎甚きによし。
- 諸病嘔吐の証あらば先ず嘔を治すべし。嘔さえ止れば熱あるは熱去り悪寒あるは悪寒去り、頭痛或は腹痛の類も自ら治するなり。
- 一男子年五十。嘔吐を患うこと三年。心煩して安からず。大便秘閉し或は時々下利し、小便白濁十日五日必発す。余診するに心下痞鞭。腸鳴して雷声の如し。此方及び三黃丸を用い時々控涎丹にて下す。出入りすること一年全治す。
- 一男子嘔吐して下利し、四肢逆厥心中煩躁して氣息已に絶えんとす。一医霍乱と云いて附子理中湯を用いて吐きて受けず。煩躁すること益々甚だし。余即ち此方を飲ましめ三服にして全愈。

生姜瀉心湯 生姜六分 半夏九分 黃連 乾姜各一分半 黃芩 人參 甘草 大棗各四分半

右八味水二盞を以てにて一盞二分を取り滓を去り、再びにて六分を取る。

- 半夏瀉心湯の證にして嘔するものを治す。
- 甘草瀉心湯は甘草六錢 半夏九分 黃連一分半 黃芩 乾姜 人參 大棗各四分半。右七味煎法前の如くして用う。是は半夏瀉心湯の証にして心煩安んずることを得ざる者を治す。

吳茱萸湯 吳茱萸一錢八分 人參 大棗各四分半 生姜九分

右四味水二盞一分を以てにて六分を取る。

○ 胸満して心下痞鞭。嘔吐せんと欲し、上衝するものを治す。

厚朴生姜半夏甘草人參湯 厚朴 生姜一朶二分 半夏九分 甘草三分 人參一分半

右五味水二盞を以て煮て六分を取る。

○ 腹張満して嘔するものを治す。

黄連湯 黄連 甘草 乾姜 桂枝 大棗各四分半 人參三分 半夏九分

右七味水二盞を以て煮て一盞二分を取り、滓を去り再煮して六分を取る。

○ 心煩心痞して腹中痛嘔吐せんと欲し、上衝するものを治す。

乾姜黄連黄芩人參湯 乾姜 黄連 黄芩 人參各七分半

右四味水一盞八分を以てにて六分を取る。

○ 心煩心下痞鞭吐下するものを治す。

大建中湯 蜀椒四分 乾姜一朶六分 人參八分 膠飴三朶二分

右四味水一盞六分を以てにて六分を取り、滓を去り飴を内れ再び煮て消せしむ。

○ 腹寒^{ひえ}て痛み、嘔して食することあたわず。腹皮起て頭足あるが如くなるものを治す。

頭足とは腹皮起の状活物頭足あるもの上るが如くを云う

○ 一男子年七十。胸満して心下痛み、発作時あり或は蚘虫^{かいちゅう}を吐して食することあたわず。伏枕(寝込むこと)すること三月許。余此方を與えて病即ち愈ゆ。

○ 一婦人年三十二。飲食すすまず、日に羸瘦し腹痛を患ること三月許。諸医血積となしてこれを治す、或は瘀血を下す薬を用て病いよいよ甚だし。余診するに臍傍に塊物ありて手足をひろげたる如くにして心下及び脇肋へ拘攣す。重くこれを按せば痛み忍ぶべからず。軽くこれを按せばさもなし。乃ち此方を作て與えて病日に消して全く愈ゆ。

黄連阿膠湯 黄連一朶二分 黄芩三分 芍薬六分 雞子黄一枚之三分一 阿膠九分

右五味水一盞半を以て先ず三味を煮て六分を取り、滓を去り膠を内れ、烱^{ようじん}盡(溶かし

尽くすこと)少し冷し、雞子黄を内れまぜ攪て、相得せしめ温服す。

○ 心中煩し拘急して臥することを得ざるものを治す。

黄芩湯 黄芩 大棗各九分 甘草 芍薬各六分

右四味水二盞を以て煮て六分を取る。

○ 心胸煩熱して下利拘急するものを治す。

○ 小児の疳証にて下利するによし。

○ 時気にあたり或は膿血しぶりはらによし。

○ 一匠人年三十五。下痢すること三年。諸薬効なし。余診するに腹皮拘急して弓弦

をなす循るが如し。乃ち此方を與う。五十劑にして全愈ゆ。

黄芩加半夏生姜湯 黄芩 大棗各六分 甘草 芍薬各四分 半夏一棗二分 生姜六分

右六味水二盞を以て煮て六分を取る。

○ 本方の証にして嘔逆するによし。

○ 腹鳴痛下痢するによし。

六物黄芩湯 黄芩 人參 乾姜各四分半 桂枝一分半 大棗四分半 半夏一棗二分 生姜六分

右六味水一盞四分を以て煮て六分を取る。

○ 心胸、煩熱、乾嘔、下利、心下痞鞭するものを治す。

三物黄芩湯 黄芩四分 苦参八分 乾地黄一盞六分

右三味水一盞八分を以て煮て六分を取る。

○ 四肢苦煩するものを治す。

白頭翁湯 白頭翁五分 黄連 黄蘗 秦皮各七分半

右四味水二盞を以て煮て六分を取る。

○ 熱利下重し、心煩或は水を飲まんと欲するを治す。

○ 痢病久しく愈ざるによし。又久痢には紫圓を一二分ずつ毎日兼用すべし。

白頭翁加甘草阿膠湯 白頭翁四分 黄連 黄蘗 秦皮各六分 甘草 阿膠各四分

右六味水一盞七分を以て煮て六分を取り、膠を内れ消せしむ。

○ 前方の証にして下血し急迫によし。

木防已湯 木防已七分半 石膏一錢半 桂枝五分 人參一錢

右五味水一盞八分を以て煮て六分を取る。

- 心下痞鞭喘満し、或は渴するを治す。
- 腫満小便利せず、心下ふさがり息だわしく、煩渴するに平水丸、控涎丹を考え兼用すべし。

木防已去石膏加茯苓芒硝湯 木防已六分 桂枝四分 人參八分 芒硝一錢二分 茯苓八分

右五味水一盞八分を以て煮て六分を取り、硝を内れ消せしむ。

- 前方の證にして痞堅し渴せず喘するものを治す。

防已茯苓湯 防已 黃耆 桂枝 各四分半 茯苓九分 甘草三分

右五味水一盞八分を以て煮て六分を取る。

- 四肢腫肉潤筋惕して水氣皮膚にありて上衝するものを治す。
- 水氣皮膚にありと云は皮うすくぎらぎらとして水の洩出るように見え、又水がじめじめと出る。或は鍼をすれば水の走ることあり。都て水腫に一处破れて水の流出るは悪証と知るべし。

防已黃耆湯 防已六分 甘草三分 黃耆七分 朮 大棗 生姜各四分半

右六味水一盞八分を以て煮て六分を取る。

- 水病身重くして汗出て悪風し、小便利せざるものを治す。
- 一男子年六十餘。平生身微腫し、皮膚黄色にして時々面目浮はれて足脛重くして歩履すること甚だなやみて園を窺^{うかが}わざること三四年なり。余此方をあたえて小便快利し諸証稍退き杖を曳て能く歩することを得たり。

枳実芍薬散 枳実 芍薬各等分

右二味杵て散と為し方寸匕を服す。日に三服す。

- 心胸逆満拘攣し、或は腹痛むものを治す。
- 産後腹痛によし。又癰疔毒腫に麦粥にて用うべし。

枳朮湯 枳実一錢二分 朮六分

右に味水一盞を以て煮て六分を取る。

- 一病人腫満して小便利せず。心下堅満す、東洞先生乃ち此方に三黄丸を兼用せしめて、全効を得られし。

排膿散 枳実一匁六分 芍薬 桔梗各六分

右三味散と為し、雞子黄三分を取り薬散とを以て雞黄相等しく揉和して相得せしめ飲に和して之を服す。日に一服す。

- 腫物を発して痛み劇しく、若し胸腹拘満し、或いは腸癰ありて便膿血するものを治す。
- 一切の腫毒久しく愈す。膿血でるものによし。伯州散を兼用し時々梅肉散にて攻むべし。

桂枝生姜枳実湯 桂枝九分 枳実一匁五分 生姜九分

右三味水一盞二分を以て煮て六分を取る。

- 胸下逆満水を吐出するものを治す。
- 心痛するには滾痰丸、三黄丸、紫圓を考えて兼用すべし。

枳実薤白桂枝湯 枳実 厚朴各八分 薤白一匁六分 桂枝 栝蒌実各二分

右五味水一盞八分を以て先ず枳実厚朴を煮て八分を取り滓を去り、諸薬を内れ煮て六分を取る。

- 胸痺して脇下逆満槍心ものを治す。
- 胸脹満し或は上逆背はりいたみ、胸中煩躁し、夜寝られざるによし。滾痰丸、三黄丸を擇て兼用すべし。
- 胸背へはり出し、骨高くなることあり。毒を除去ればひきく平になるなり。諸病ともに毒の聚る処は手にて按ぜば知れるなり。

橘皮枳実生姜湯 橘皮二匁四分 生姜一匁二分 枳実四分半

右三味水一盞半を以て煮て六分を取る。

- 胸つかえ塞がり満して嘔吐し、或はしゃくり出るによし。滾痰丸、三黄丸、紫圓の類を兼用すべし。

茯苓飲 茯苓 人參 朮各六分 枳実四分 橘皮五分 生姜八分

右六味水二盞を以て煮て六分を取る。

- 心胸の中に停痰ありて宿水を吐し、或は嘸し呑酸し、或は心下悸し胸満、或は小便不利するものを治す
- 痰飲嘔逆には滾痰丸を兼用すべし。
- 痰涎卒にふさがるに用いて効あり。白散或は紫圓にて下すべし。
- 一男子水を吐し、或は嘈雜呑酸胸背刺痛す。これを按ぜば噯気を発し、吃々として止す。心腹水声をなす。患ること一年なり。余此方を用て滾痰丸、紫圓を以てこ

れを攻めて全愈。

- 一婦人年三十六。反胃を患ること已に七月。腹中雷鳴して二便或は下痢、或は利せず。面目浮腫心下悸痞し、時に陰戸鳴ること轉失氣^{てんしつ き}(おならをすること)の如し。この方をあたえて大いに効を得たり。

橘皮竹筍湯 橘皮三錢二分 竹筍 大棗 生姜各八分 甘草五分 人參三分
右六味水二盞を以て煮て六分を取る。

- 胸中痺で吃逆して心胸に迫るものを治す。滾痰丸、紫圓を雑て兼用すべし。
- 一賈人七十餘歳、吃逆を患ること三十日、口に勺飲も通ぜず。諸医治するなし。愈えざること十七八日。東洞先生往て診するに咽喉の肉脱して吃々の声已に出ること尽て、唯腹中に響あるばかりなり。乃ち橘皮竹筍湯一貼重さ十二錢に作て與えらる。二劑にして効を奏す。

橘皮湯 橘皮二錢 生姜四錢

右二味水一盞四分を以て煮て六分を取る。

- 胸中痺して嘔噦して手足厥冷するを治す。
- 一男子熱病を患ること十日許、吃逆を發し愈ざること一昼夜。已に死せんとす。余此方を與えて治す。

桂枝茯苓丸 桂枝 茯苓 芍藥 桃仁 牡丹皮各等分

右五味杵て末と為し、煉蜜にて和し丸とすること兔屎大の如し。

- 漏下して拘攣上逆心悸して、月經調わず。或は妊娠胎動するによし。又消石大圓或は夷則丸を兼用すべし。

芎歸膠艾湯 芎藭 阿膠 甘草各三分 艾葉 當歸各四分半 芍藥六分 乾地黄九分

右七味水一盞清酒一盞合し以て煮て六分を取り、膠を内れ消せしむ。

- 婦人崩漏とて卒^{にわか}に血おりして目眩するによし。
- 産後大に血おりし血暈し、或は腹痛するによし。又芎黃散を兼用すべし。
- 墮胎の後腹脹煩悶して痛み、死せんとするに数効を得たり。
- 産後の血おりには桃核承氣湯の條下考べし。
- ^{あるひと}或問うて曰く、東洞先生は男子婦人の治法異なることなしといえり。此方の如き実に婦人の血証を治するものは如何。余答う。此方を以て男子の吐血下血等諸血証

に用いるに効驗あり。何ぞただの婦人の治方とのみいうことを得んや。

旋復花代赭石湯 旋復花六分 人參四分 生姜一朶 半夏一朶二分 代赭石二分
大棗 甘草各六分

右七味水二盞を以て煮て一盞二分を取り、滓を去り再煎して六分を取る。

- 心下痞堅にして噯氣除かざるものを治す。
- 下利止まず、嘔吐するによし。
- 一男子年四十餘。宿水を吐すること七八年。心下痞堅にして腹中水声ありて止む時なく、噯氣除かず。鼻塞がりて香臭をきかず。諸医治することを得ず。余此方を作て飲ましめて愈ることを得たり。

赤石脂禹餘糧湯 赤石脂 禹餘糧各一朶六分

右二味水一盞八分を以て煮て一分を取る。

- 病毒臍下にありて痛み、下利するものを治す。
- 久しく下利して膿血を下すによし。

桃花湯 赤石脂一朶二分 乾姜七厘半 粳米一朶五分

右三味水二盞を以てにて六分を取る。更に赤石脂末方寸匕を内れる。

- 下利便膿血腹痛のものを治す。

蜜煎導

蜜一味を銅器の中に入れ、微火にて煮て飴の如くなし、^{かきませ}擾^{こげつか}て焦着さしめず。丸となる

べきを^{うかがい}候^{てい}て捻りて挺(棒状にする)となし、大き指の如く長さ二寸許にして穀道(肛門)の中へ入る。

- 肛中乾燥大便不通のものを治す。

酸棗仁湯 酸棗仁二朶四分 甘草一分 知母 茯苓 芎藭各二分

右五味水一盞六分を以て先ず酸棗仁を煮て一盞二分を取り、諸薬を内れ煮て六分を取る。

- 煩躁して眠ることを得ざる者を治す。

葶藶大棗湯 葶藶五分 大棗三朶

右二味水一盞八分を以て棗を煮て一盞二分を取り、滓を去り葶藶を内れ煮て六分を取る。

○ 胸満して咳逆喘鳴迫塞、一身面目浮腫するものを治す。

麻仁丸 麻仁十二両 芍薬四両 大黄 厚朴各八両 枳実四両 杏仁六両
右六味杵て之を末とし、煉蜜にて和して丸と為す。

○ 大便堅して通じ難きものを治す。

已椒藜黄丸 防已 椒目 葶藶 大黄各 両(原文両数不明。金匱要略によれば一両である。)

右四味之を末し、蜜丸梧子大の如くし、一丸を日に三服す。

○ 腹満して口舌乾燥して二便通ぜざるものを治す。

○ 一婦人年五十許。数年腰中冷て小便頻数す。後腰脚痛みて起居することを得ず。腹満大便秘閉。口舌乾燥手足浮腫氣急塞迫して、已に絶えんとす。余此方を作てあたえ、諸症全く愈て歩履することを得たり。

蜀漆散 蜀漆 雲母 龍骨各等分

右三味杵て末と為し、未だ発せざる前に漿水を以て半錢を服す。

○ 悪寒劇しく熱少なくて臍下動あるものを治す。

漿は酢なり。飯の熱きを冷水中に投じ、五六日を経て味酢くなりて白花を生ずるを云う。

十棗湯 芫花 甘遂 大戟各等分

右三味各別に搗^{つき}て散と為し、水一盞を以て大棗十枚を煮て六分を取り、滓を去り薬末一錢を内れ頓服す。

○ 心下痞して鞭満し、咳煩掣痛するものを治す。

○ 肩背重く引きつりだるく痛むによし。

○ 中風痿躄痛風脚氣水病によし。或は手肘^{ひえ}冷て力なく、或は不仁、或は麻痺するに宜し。

○ 咳嗽して脇下へひびき、ひっぱり痛むによし。

桔梗白散 桔梗 貝母各三分 巴豆一分

右三味末と為し、白飲を以て和し服す。

○ 病毒胸にありて、或は膿汁を吐し、咽喉痛痰ふさがり急にせりつめ、息することならざるによし。

○ 中風卒倒して痰涎ふさがり氣絶せんとするに牙関緊急せば、鼻より吹き入るべし。

○ 肺癰外より見るべからず。唯膿汁を吐し、胸痛するものを以て徴とすべし。実は肺癰腸癰と名を云うには及ばざるなり。

- 一男子冬月喘急を發し、咽へ痰せまり肩息して死せんとするに、此方一錢をあたえて痰涎二三合を吐して愈たり。
- 一婦人小瘡を病て敷藥して後、忽然として遍身腫を發し、小便不利し心胸煩悶して喘鳴迫塞して幾ど死せんとす。余此方一錢をあたえて水数升を吐す。再飲して大に吐下して疾苦立に安し。前方を用いること五六日にして全愈。
- 一男子咽喉腫痛言語することあたわず。湯水下らず。痰咳ありて痛み忍べからず。余此方一撮^{いっさつ}を飲ましめ、稠痰数升を吐て痛み忽に愈て後、排膿湯を用て全愈。
- 一小兒三歳。所謂驚風を發し、愈ざること半日。医薬並に治することを得ず。余此方をあたえて咽に下れば、痰沫を吐出し、啼声を發す。已後此證にあえば効を得ること擧て数えがたし。

走馬湯 杏仁 巴豆各二枚

右二味綿を以て纏^つみ槌で碎かしめ、熱湯六分にて捻^{ひね}りて白汁を取り之を飲む。

- 胸中煩悶して、或は心痛、或は腹脹痛するものを治す。
 - 僧天然なるものあり。余が方外の友なり。我東洞翁の術を信じてこれを学び、施治すること多年。嘗て其の試効する所を録して余に遺る。今此に附して参考に備う。
- 治眼疾方 備急圓、桔梗白散、走馬湯。此三方内障外障及び諸眼疾なる者を治す。之を點じ或は沸湯に浸し之を洗うも亦佳し。

蛇床子散 眼中に小瘡生じ痛み甚だしき者に點じて効有り。

礬石湯、消礬散、礬石丸、白虎湯、梔子蘘皮湯、文蛤散、文蛤湯、大黃硝石湯、大黃黃連瀉心湯、瀉心湯、附子瀉心湯、薏苡附子敗醬散、大黃附子湯、麻黃附子細辛湯、大烏頭煎、八味丸、赤丸、天雄散、茵蔯蒿湯、梔子乾姜湯、大陷胸湯、半夏乾姜散、甘草乾姜湯、甘草粉蜜湯、甘草湯。

右二十六方、眼目赤痛涙出て明を羞ずを治す。○目赤瀼痛○赤目瘀肉高く起こり痛み忍ぶべからず○赤目弩肉頭風○目睛痛み暴なり○目中赤脉○目痛眦爛れ腫赤○赤爛眼倒睫○眼瞼赤腫○風眼腫痛める者を或は之を點じ、或は洗う。又症に随い之を服すも佳也。

備急圓 大黃 巴豆 乾姜各一兩

右三味杵て末とし、蜜で和し丸とす。

- 食傷或は霍乱心腹急痛するによし。一切急迫の毒を解す。
- 僧天然曰く、備急圓、桔梗白散、走馬湯の三方、癰、疔、疥癬、癩風、諸腫毒、諸惡瘡の痛痒、或は蛇、蜂、蜈蚣、蚊、蝨、鼠、猫、犬狼、及び諸毒蟲魚獸傷を治す。之を傷に敷け之を擦り、而して後之を服すに宜し。

又牛馬の諸疾之を與うも可なり。一服、三錢、六錢自り八九錢、十錢二十錢許に至る。

礬石湯 礬石 兩(原文兩数不明。類聚方広義によれば二兩である)

右一味漿水一斗五升を以て煮ること三五沸、脚を浸して良し。

- 所謂脚氣の症痿弱にして不仁し、或は毒氣上て心を衝くものを治す。
- 脚氣腫滿の類、或は脚痛中風痛風、或は腰痛の類、並に此湯にて脚を洗い浸し、或は腰湯をさすべし。猶東洞先生浴湯の方あり。

僧天然曰く、礬石湯、礬石丸、消礬散の三方は腋臭を擦りて必ず効有り。

礬石丸 礬石三分 杏仁二分

右二味之を末とし煉蜜にて和して棗核大に丸め、藏中に内る。

- 經水利せず。赤白帶下によろし。

蛇床子散 蛇床子

右一味之を末とし、白粉少許を以て和して相得さしめ、棗大の如くし、綿に^{つつみ}裹て之内る。自然に温む。

- 白物を下して陰中痒く或は小瘡を生ずるものを治す。
僧天然曰く、陰囊湿痒を治す。或は諸腫諸瘡腐爛して痛痒甚き者患る処を擦りて宜し。

古方便覽下冊終